

「自分らしい死」とは何か

文化人類学・医療人類学 磯野真穂氏

「自分らしさ」が讃えられ始め、早 20 年が経過する。「自分らしさ」を問題解決における手段とする考えは、ありとあらゆる領域で見られるが、医療も例外ではない。「重い病気になっても自分らしく生きる」、「自分らしく死ぬ」といった形で、「自分らしさ」は讃えられ、これは医療者目線からは「患者さんらしさ」といった言葉に変換される。

「自分らしさ」の称揚と、昭和的な価値観が否定される時期は重なっている。つまり、「自分らしさ」とは旧態然とした慣習やそれを支える価値観を打ち破るといった意味合いがあり、その点においてこの言葉は価値を持つ。しかし「自分らしく」あることを兎にも角にも讃える風潮が当たり前になった今、そろそろこの言葉を批判的に捉える視座も必要ではないだろうか。必要なのは、否定の先に、何が生まれたのか、あるいは生まれなかったのか、といった問いである。

「自分らしくある」ことを問題の解決策として掲げるやり方は、個人を深掘りしていけば、その人の核となる何かが埋まっており、それを引き出すと望ましいことが起きるといった前提に支えられている。これ前提自体を私は無碍に否定したいわけではない。ただ、このように個人ばかりに強烈な光を当てるやり方は、（１）人が共同で暮らす生き物であるということ、（２）それゆえに、その中でなされる思考や選択は、そこで共有される制度や価値に多分に影響を受けていることを見えづらくするのではないか。さらにいえば、そのような制度や共同的価値に影響を受けた選択は、「本当のその人らしさではない。ゆえに良からぬものである」という安易な倫理観を生み出していることはないだろうか。

特に本発表で焦点を当てる死は、死ぬ人だけのものではなく、公共性のある現象として古来から捉えられていた。それだからこそ、死を迎える人へのケアや葬儀の方法などには地域に応じた特色が見られるのであり、かつそれら特色は、人は死んだらどこへゆき、生者と死者はどのようにつながっているのかという、科学的には証明し得ない宇宙観と繋がっていた。

個々の医療者がこれらを大切なものとするかどうかは別にして、現代医学は、死にまつわるこのような宇宙観を脱色した形で展開されている。人生会議も否応なくその影響を受けているだろう。本発表においては、「自分らしい死」をあえて批判的に捉えることで、現代の死が獲得したもの、失ったものを考えてみたい。